

## 東京土産 サンプル

※ このファイルは、本編と同じ書式を用いて作品の一部を抜粋、コラージュしたものです。文章の一部は、意図的に順序を変えてあるところもあります。書式、見やすさ、内容の雰囲気参考にさせて下さい。

あるショタ同人作家の会員制ブログに 5/6 より数回に分け連載された記事より転載。

### 5/6 東京行 番外編 旅先でみかけたかわいい男の子

世間はGWですから、親子連れ中心ですが街にはかわいい男の子がいっぱいで、ウォッチングの楽しみには事欠きません。

(中略)

背景に、いろいろドラマを感じました。

話は最終移動日前夜に戻ります。

オフのあと、ネカフェで PC や携帯の充電をしながら一服し、博多■神でラーメン食って、宿を探すことにしました。

なんか人が多すぎるんで、裏路地にまわり、携帯の楽■トラベルで付近宿を検索。しかしネカフェでやってあげばよかったよ、とか思いながら、ふとみると出入り口のない側のコンビニの壁付近に、黒い無地野球帽をかぶった、○学校高学年と見える男の子が一人ガラスの壁にもたれています……。

時刻は 23 時を回っています。おおかた親の買い物待ちでしょう。しかし、顔は暗がりで見えないもののやせすぎずの背格好、健康そうなちよっと濃いめの肌、好みっぽい。帰宅は明日なので、わずかでもチャンスがありそうなら、粘ってもいいかと、携帯をいじるふりをしながらそばを通り過ぎ、最短距離の路地を回って、もとの位置を目指します。いなくなれば何事もなく寝るだけです。

はたして……いましたね。しかも座っています。服装は蒸した気候の関係で汗ばんでいても、こぎれいで、荷物もない。手ぶらです。なら家出とかじゃないな。

しげしげ見ていたら、頭を上げた少年と目が合ってしまいました。く、

失敗。しかしこうなれば、玉砕覚悟で話しかけてみることに。近所じゃないので別に不審者扱いされてもかまわんです。歩み寄り、ある程度の距離で姿勢を下げ、声をかける……。

「ちょっと僕？」

20cm くらい飛びのくような驚きようです。そこまで怖がらなくていいのにw

お、地味目ながら南洋系な感じの愛らしい丸顔で、野球少年風。いい感じです。五年生くらいかな……。

「警察？」

あっというまに立ち直ったような冷めた声。でもいい感じの掠れ具合。変声期はこれからですね。

「こんな大荷物持った警察とか補導員おるか？」

僕はちょっと笑いながら答えます。

「こんなとこで何してんの？ 誰か待ってるの？」

返事無し。警戒中かな。しばらく待ちます。

「別に」

いけるかな。僕は周りをちょっと確認しました。

「時間あったらちょっと、こっちには用事あるんやけどな」

「何？」

「警察とは逆みたいな人なんやけど俺」

「……犯人？」

この語彙力。なかなかかわいげあるなあ。

「いやまあこれからだろうかなと思って。それでもついてくる気あったら、小遣いぐらいのお礼はできるけど来る気あるか？」

少年は腰をあげて尻を払いました。

よしよし、どこかで脱がして写真ぐらいは撮れるな。携帯じゃないまでもなデジカメあるし。いい東京土産ができそうです。

## 5/X 東京土産 1

手を繋いで歩きました。小さな手。子どもというのは、普段接していない人は気づきにくいですが、どこもかしこも意外と小さいもんなんですよ。

五月というのに夜になっても街はまだまだ蒸します。

「何歳？」

「10」

おっと。二つほど下に見えるな。ただ嘘かもしれない。体売る客引きにしては場所がおかしい。家出でもない。わからないことが多いな。

「で、何してくれるのかな？」

「何でも」

「何でも？」

言質にしてやるか。後悔するぞ……。

「いくらぐらい欲しい？」

「お金いらない」

「ん？」

「……………」

「シャワー浴びさせてくれて、終わってからベッドでゆっくり寝させてくれたら何してもいい。どこに泊まってるの？」

ほーう。

「いやまだこれからやな」

携帯を見せます。

「よその子連れて入れるの？」

「親子のふりして入る」

僕は設定情報を大人一人から大人一人子ども一人に切り換え、検索しました。ダブルはだめで、こういう場合ツインです。

「ふうん……」

首を伸ばし、僕の携帯をのぞき込みます。

シュールな会話の流れと、冷めた態度と、この子どもらしい仕草と。

「名前は？」

「———。」

下の名前だけ言いました。これを僕の名字にくっつけばいいわけです。

「何してもいいとか言うて、俺が何するかわかるのか自分？」

歩きながら、さらに話しました。

「……エッチなこと……」

やっぱり、そういう目的だったか。不慣れで、行動パターンがまだつくれてなかったんだろうかな。ここは二丁目も目と鼻の先だ。同性愛的な興味からか、もしくは金のためか……。

「何でも言うて、そのくらいで済むと思てんの？ 俺犯人やで犯人」  
手を繋いだまま、僕の顔を見上げる少年。ぜんぜんびびってません。

「何するの？」

「何でもということは、殺してもいいと解釈するな」

冗談めかした口調にはしていますが、さすがにひらく間。

「……殺すの？」

「……してはみたいな。何してもいいなんて子はなかなかおらんしな」  
ナビウォークのご案内によるホテルは、横断歩道の向かい側です。割合、静かな通りです。

「変な人……」

……笑ってるな。しかしどうも冗談と受け取ってるからとは思えない。

(中略)

## 5/X 東京土産 2

例え僕の言葉がもしかしたら冗談ではないかもしれないと思ったとしても、少しは酷い目に合ってみたい自暴自棄な気分、自殺願望を抱くぐらいのダウン状態なら、こんな風についてくる場合もあるわけですよ。

親子ということにして、難なくチェックインしました。明日まだ祝日ですからね。疑われる由もない。ありきたりのビジネスホテルのツインですが、入り口の表通りが煌々としてるような場所のは、避けました。もしかしたら本当にやることになるかもしれないと思いましてね。

(中略)

「ここで脱げよ……」

僕は少年の首を後ろからドアに押しつけるように、手でつかみます。それから、こちらを向かせ両肩をドアに押しつけてやります。ちょっと怯えが見えますね。反応は鈍めですが、面白くなってきました。

手を離すと、少年は二枚のシャツを手早く脱ぎ捨て、一度両腕を下ろして僕を見ました。品定めでもして欲しいのでしょうか。売ったり、ハッテンバで誰かひっつけた経験とか、あるんでしょうかね。

バランスのいい肉体です。少年らしい皮下脂肪は全体に柔らかな曲線を残し、特に手首の微妙なくびれが、10歳というのがほぼ嘘だと、僕に感じさせました。しかし胸、肩、腹筋のあたりは、すでに筋肉の走りが十分に読み取れ、生得的なものだけでなく、ちょっと鍛えたような感じも、漂っています。

僕のいやらしい目線の品定めに満足したか、少年はバックルに指をかけベルトをはずし、ジッパーの部分を左右に開き、ジーンズを下ろしていきます。ブリーフでした。腰のあたりは少し肉づきがよく脂肪也多めです。腿の内側、やはりなかなかの力強い太さと、健康な筋肉です。サッカーかなあ。

パンツを下ろしました。膝まで下ろして一度僕を見ました。性器は、ちょっぴり膨らんでいますね。何を期待しているのでしょうか。

「後ろ向いてみて」

僕はなんとなく、部屋のドアをちらっと確認してから命じました。彼はバスルームのドアに手をつき、尻をちょっと突き出してくれます。いいですね。しっかりした腰つきから、腰骨の下の部分に、微妙なくぼみ。日焼けが薄く白い尻です。

## 5/X 東京土産3

(中略)

僕は少年の手を引いて、また裸でバスルーム前に立たせました。起立の姿勢ですな。

「質問してええかな」

少年はうなずきます。

「あんなとこで何してたん？」

「時間つぶし……」

「つぶしてからどこ行くつもりやったん？」

「〇〇公園と……」

市街地のハッテンバですね。某公衆トイレも予定にあったようです。

「男ひっかけか。小さすぎてやばいから歳は嘘言うてんのか。1〇ではどちみちやばいけどな」

返事がないですね。

「まあええわはじめるか」

「あ、や……！」

片足が大きく上がると同時に、そのうめきを聞きました。僕はあまり叩きつけるような感じにならないように、最初少年のからだを斜めに倒し、それから狭い床に投げ出しました。

よだれでもこぼれたでしょう口の中を嚙んだか、それならすまないことをしました。口を拭い、片肘を床について僕を見上げています。恐怖というより、驚きかなこの目は。

「いやとか聞こえたから……殺されるのいやなん？ ええて言うたがな」

少年は黙っています。

「すぐはいややったん？ ゆっくり、じっくり苦しいのが好きなん？」

「す……好きって言ってない……していいって……」

しどろもどろですね。また口を拭っています。

「ああ、俺の好きなようにしてええいうことやったな。……ほたらうつむいてもらおうか」

## 5/X 東京土産 4

「殺すとかなんとか言うてても、気持ちよくしてもらえとか期待してた？ このおしり気持ちよくしてもらえとか」

僕は尻の割れ目に中指を沿わせて、穴に指を突き入れました。第一関節だけです。びくんとからだが傾きます。

「ちんちん気持ちよくしてもらえとか」

僕は彼の足を無理に開いて、からだの下になっている性器の、睾丸の片方をぎゅっと強くつまみました。

「あいッ……た！」

一度尻を持ち上げ、どんと腰を落としてやります。

「がっ……は……」

咳き込んでいます

僕は彼の背にうつ伏せに乗り、少年の顔を無理に横に向けさせ、僕の顔を見せました。

反抗的な態度ってわけでもないんです。この、シュールさと虚無的な感じは、いったい何だろう？

僕は荷物固定のゴムロープを出し、少年の首に幾重にか巻きつけました。伸縮するのでぎっちりといかないのですが、こっちで絞めつけなくてもやんわりと持続的に息苦しいはず。そのくらいの巻き加減にし

て、端は腕のところに伸ばし、手首にロープを回し金具をひっかけ、ガムテープで固定しました。

尻に……………。

僕は少し考え、かばんからマジックを出しました。

「こういうの嫌いかな？」

さすがに少年はうなずきました。

「すまんな変態で。俺こういうの好きやねん。何してもいいと言われてたらしたいがな」

「……いる！ ……入れて！ ち、ん……ちん……」

**本編をお楽しみに!!**